

応緑、ゲート商品機能拡充

事業売上高 倍増を目指す 3シリーズ展開

総合ゲートメーカー、応緑（本社〓兵庫県姫路市、河越祥郎社長）は、本年4月に創業50周年を迎えることを記念し、既存商品を3つにシリーズ化することで新製品としてラインアップした。新設需要はじめ、設置から経年したゲート（門扉）のメンテナンスやリニューアル、電動化などあらゆるニーズに幅広く対応し、2024年度をめどにゲート事業の売り上げを従来比2倍の6億5000万円にまで拡大を目指す。



河越社長

新たにシリーズ展開するのは「エアポートゲート」「セパレートゲート」「スロープゲート」の3つ。エアポートゲートは最高品質の大型電動門扉で、パツ



エアポートゲート施工例（三沢空港）

クアッパシステムにより、メイン電動モーター異常時に自動切り替えでサブモーター機動できることや、停電時にも手動で開閉操作が可能。セパレートゲートは連結・分離可能門扉で、新開発の連結装置「ゲートコネクター」を採用し、連結された門扉を分離移動することで、開口間口をフレキシブルに変化できる。スロープゲートは、新開発の「スロープブレイキシステム」を採用し、勾配地に手動・自動ゲートを設置できるほか、エリア景観にに応じて意匠デザイン仕上げも可能としている。

同社は、ゲート事業とハウジング事業の2部門で事業を展開。このうちゲート事業は、1972年創業時のオーダーボードの販売を皮切りに、2009年に神戸空港（神戸市）へエアポートゲートを納入したことを契機に本格展開を開始。現在では国内トップクラスの高級門扉を提供しており、一般住宅から大型施設（倉庫・学校・空港・火力発電所・大使館・警察・自衛隊等）まで、幅広く対応している。サイズ幅が6畳以下の小型ゲートは、加工しやすく価格も安いアルミ製品が主流の中、同社では応用性の高い鋼製（SS400）製品がメイン。数年で交換を要する可能性が



セパレートゲート施工例（川崎重工業明石工場）
①、スロープゲート施工例（祇園辻利）

あるアルミ製と比較して、標準仕様で溶融亜鉛めっきを施すことで30～50年の耐久期間となり、ライフサイクルコストで優位になるという。

近年、安全性やセキュリティの面などから住宅や施設におけるゲートへのニーズが高まっている。また、国内の潜在需要として、建設から30年を経過した施設が30万件以上あり、

とされており、メンテナンスやリプレースを必要とするゲートもそれ以上の数が見込まれている。しかし、その一方、国内で下部レールを含めたゲートのメンテナンスを行う専門メーカーは、事業から撤退するなど極めて数が少ないということが課題とされている。同社では、国内工場（姫路市）と協力工場（川崎重工業）と協働して製作、設計から設置までを一貫して手掛け、これまでも応用性が高く高精度の独自鋼製ゲートの提供に注力。今後は3つのシリーズを基軸に、より省力化や耐久性、意匠性を高めた商品開発を進め、商品バリエーションを一層拡充していく方針で「長年培ってきた独自技術を生かして、社会に貢献していきたい」（河越社長）としている。